

### 4-1-9-3 麻酔科

鈴木康之

#### 1. 診療活動

平成 16 年 5 月 1 日より鈴木康之医長が集中治療科から麻酔科へ配属され、その体制のもと、平成 16 年度は 4276 件の麻酔管理をおこない、(15 年度は 4008 件) 国立成育医療センター開設以来過去最高の麻酔件数となっている。診療科別には外科 696 件、耳鼻咽喉科 556 件、産科 453 件、泌尿器科 343 件、眼科 291 件の順に多い。年齢別には 1 歳から 5 歳が 1369 例、6 歳から 18 歳が 1322 例、1 歳未満の乳児の症例が 653 例(15.3%)、うち新生児症例は 86 例(2%)となり、新生児症例の絶対数も増加傾向である。

開設以来麻酔科医による硬膜外麻酔による無痛分娩をおこなっており、その件数は平成 14 年 81 件、15 年 221 件、16 年が 294 件と年々増加している。開設当初は関係各所の理解や連携が不十分だったため、深夜帯のカテーテル挿入など麻酔科医の負担が多かったが、計画無痛分娩を推奨するようにしている。3 月 13 日には読売新聞に当センターの無痛分娩が取り上げられ、評判が広まり今後一層増加すると予想される。現状では、薬剤や機材の準備で麻酔科医の時間が無駄に費やされていると同時に産婦さんに好ましい医療が提供できないと考えており、薬剤部、看護部の協力のもとに改善を目指したい。

ハイリスク妊娠の増加にともない帝王切開手術が増加しており、その増加には歯止めがかからない状況である。その周術期合併症で肺梗塞症例が帝王切開術後に 2 例あったが、幸い早期発見と急性期初期治療により、2 例とも救命することが可能であった。総合的な内科重症患者治療体制を持たない当施設としては、安定後早期に成人施設への搬送が求められ、そうした協力体制が確立されたことは、今年度の重要な発展であった。

また、当直帯においては手術集中治療部として 4 名で当直し、手術室業務と集中治療室業務を協力体制のもとにおこなっている。2 名の麻酔担当医が夜間帯の緊急手術や、病棟での急変患者の対応をおこなっている。緊急麻酔症例も増加しており平成 16 年度は 414 例で、全麻酔症例の 9.7%となった。加えて定時手術が日勤帯を越える割合は全体の 20%を越えており、これも麻酔科医のワークロードを増やしている。

麻酔科業務のなかで術前患者の評価は重要であり、日本麻酔科学会の業務改善提言の中でも推奨されているが、当科は開設以来これを行っており、これは効率の良い手術室運用に貢献している。麻酔科術前評価外来は 2 名の麻酔科医が 2 階の 2 ブースにおいて毎日おこなっている。それと並行して CT、ABR、脳波検査などの鎮静外来、在宅酸素人工呼吸器外来、無痛分娩外来をおこなっている。在宅呼吸管理の患者数も増加し、当センター開設以来、在宅酸素患者は 110 名、在宅人工呼吸患者は 38 名となっている。外来ブースもしくはデイケアー他診療科との協力のもと診療をおこなっている。

その他一般病棟の 7~8 病棟でも常時 12 名程度の慢性人工呼吸管理の患者の呼吸管理をおこなっているため、麻酔科医の業務は 24 時間体制で多忙である。

#### 2. 教育

毎朝 7 時 30 分から日替わりで症例検討、救急、麻酔、ICU のテーマ別 30 分間講義、抄読会、Byron Aoki 医師(前カピオラニ小児病院小児集中治療部長)の講義、帝京大学諏訪教授の講義と早朝にレジデントに対して講義をおこなっている。17 時から月曜日は症例検討会を火曜日には宮坂部長による Dripps 麻酔基本レクチャー、水曜日にショートレクチャー、木曜日は病棟回診、金曜日は田中医師による産科麻酔講義をおこない、レジデントへの教育を充実させている。

### **3. 学生実習**

4月から8月にかけて東邦大学医学部6年生が2名、聖マリアンナ医科大学6年生が2名、慈恵会医科大学6年生が9名学生実習をおこなった。

### **4. その他**

人事では16年11月から金澤医師が常勤となり、17年3月から下村医師を常勤として迎え、それまでの6人から7人常勤体制となった。レジデントが7人から9人のため、手術症例の麻酔管理、病棟呼吸管理、病棟疼痛管理、麻酔科外来での術前評価外来、鎮静外来、在宅酸素人工呼吸管理外来と多種多様に渡る業務を科内のチームワークおよび他科との連携により、スムーズにこなしている。麻酔科は今後もより一層部内および他科とのチームワークを大切に、多種多様な疾患や合併症の多い症例のリスクを正しく評価し、各診療科との協力のもとに患者の安全と快適を目指して診療をおこなう所存である。